

トマト コナジラミ類について



図1 オンシツコナジラミ成虫（左）と幼虫（右） 図2 タバココナジラミ成虫（左）と幼虫（右）



図3 すず病が発生した果実



図4 果実の着色不良



図5 トマト黄化葉巻病の発病株

1 生態

トマトに寄生するコナジラミは、オンシツコナジラミ（体長0.8～1.1mm、成虫の翅は定位している葉面に対しほぼ平行にたたまれており、左右の翅が重なっている（図1左）。4齢幼虫は楕円形、白色で突起が多い。（図1右）とタバココナジラミ（体長約0.8mm、成虫の翅は定位している葉面に対し45度以上の角度でたたみ、左右の翅が重ならず隙間から黄色の腹部背面が見える（図2左）。4齢幼虫は後部がやや細い楕円形、黄色で突起が少ない（図2右）である。タバココナジラミは複数のバイオタイプが発見されており、農作物への加害は主にバイオタイプBとバイオタイプQにより行われるが、外見上の形態類似している。

コナジラミ類の排泄物は粘度が高く、葉や果実に堆積するとすす病菌が発生（図3）し、果実の商品価値を損なうほか、同化・呼吸作用を阻害して生育に影響する。また、タバココナジラミが多数寄生すると果実に着色異常が生じ、商品価値を損なう（図4）。

タバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルスなどを媒介する。トマト黄化葉巻病（図5）に罹病すると新葉の周縁が退緑しながら葉巻症状を呈し、頂部が叢生して株全体が萎縮する。また、果実の着果・肥大に影響し、減収する。

オンシツコナジラミは屋外で越冬するが、タバココナジラミは氷点下の低温で致死するため、本県

では屋外で越冬できないと考えられる。

2 発生状況

オンシツコナジラミの生育適温は20～28℃であるのに対し、タバココナジラミは比較的高温の25℃～30℃が生育適温である。このため、露地では6～7月と9～10月にオンシツコナジラミの発生が多く、8～10月にタバココナジラミの発生が多くなる。

冬春の施設栽培トマトでは、気温の低下とともに施設内に侵入し、越冬・増殖して翌春以降に施設外に拡散する。この時、トマト黄化葉巻病などのウイルス病の保毒虫も拡散すると考えられるので、適切な侵入・増殖・拡散防止対策を行うことが必要である。

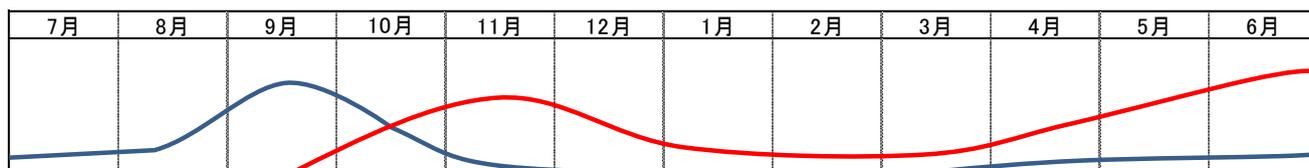


図5 コナジラミ類成虫の発生消長

(— : 施設内、 — : 施設外)

3 防除対策

(1) 薬剤による防除

同一系統薬剤の連用は薬剤抵抗性の発達につながるため、作用機作が異なる薬剤をローテーションで使用する。タバココナジラミバイオタイプQはネオニコチノイド系の複数の薬剤に加え、ピリプロキシフェンやクロルフェナピル等に対しても抵抗性が発達しているため、薬剤選定に注意する。タバココナジラミは屋外で越冬できないため、冬期の施設内の防除を徹底し、翌春以降の増加を抑える。

(2) 耕種的防除

施設の開口部に、目合い0.4mm以下の防虫ネットを展張し、施設内への侵入を防止する。また、紫外線除去フィルムを用いても侵入防止に効果がある。コナジラミ類成虫は黄色に誘引されるため、施設内外に黄色の粘着トラップを設置する。

冬春の作型では、栽培終了後に残渣を搬出する前に施設を密閉し、太陽熱により蒸し込み処理することで、周辺への分散や次作への持越しを防ぐ。また、夏秋の作型では栽培終了後に施設を開放し、施設内を氷点下にすることで次作への持越しを防ぐ。

(3) 圃場管理

圃場周辺および施設内の除草を徹底し、コナジラミ類の増殖を防ぐ。